

日本と中国の関係を歴史的にみたととき、現在ほど市民レベルの友好関係が発展したことはない。相互に理解し合うことは、相互に尊重し合うことであり、相互に発展することに通じる。学术交流の発展や、市民レベルの広範な交流が更に発展することは、大きな「願い」である。

写真説明

写①、出土した等身大の秦始皇帝陵兵馬俑

抗の俑群（西安、秦俑より）

写②、北京郊外の八達嶺あたりでは、万里の長城も常に補修が進められている。

写③、北京から周口店洞穴に向う途中に、

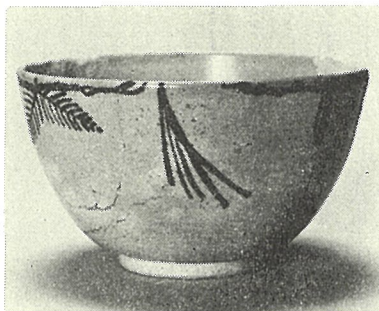
蘆溝橋がある。蘆溝橋事件の際に、日本軍の攻撃によって無惨な姿となった宛平県城は、記念碑的に保存され、広島島の原爆ドームと同様に見学者が多い。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）

同志社校地出土の埋蔵文化財

鈴木 重治

朝日焼注連縄文碗



江戸時代 口径11.1cm、器高6.4cm、底径4.6cm
同志社中学校新彰栄館増築地点 SK204 出土

同志社中学校新彰栄館増築地点の発掘調査の際、径二・四米の二段掘りの土坑が検出され、その埋没土の中から土師器の皿や焼塩壺などと共に出土したのが当資料である。

まろみのある整正優美なプロポーションを持つ碗で、口縁直下に鉄絵による注連縄

文が雄渾な筆致で描かれていて、飾りの護葉や裏白も素朴であり、さわやかである。

釉調は、淡い桃黄色で、露胎部の暈付を除いて全面に施釉されていて、胎土はきめの細かい黄白色を呈している。また器の内外面には、部分的に紅斑を散在させて、いわゆる御本手の茶碗の典型である。暈付に接して、権十郎印と呼ばれる早朝日の刻印があり、遠州好みの七窯の一つとしての朝日焼の出土例としても、稀れにみる優品である。ちなみに、朝日焼は慶長年間（一五九六～一六一五）奥村次郎右衛門によって宇治朝日山に築窯されたのが創始とされている。

当資料は、文様構成からも明らかに若松文、松竹梅文、万歳文などの碗と同様、正月の初釜の際に使用されたものである。

出土地点が、薩摩藩邸の跡地だけに、武士のかかわる綺麗さびの茶としてばかりでなく勇猛な武士と安らぎの対比にまで想いを馳せることすら可能である。また、共存資料の土師器や焼塩壺は、近世の物質文化史を理解する上で考古学的に重視される一群であり、当資料の検出の意義は大きい。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）